様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２８　年　　６　月　　２　日現在

機関番号：１１６０１

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2015

課題番号：２５３８１１６３

研究課題名（和文）家庭科教育において生活経営力の育成を評価するパフォーマンス課題の開発

研究課題名（英文）Development of performance tasks that evaluate ability to manage life's resources as part of home economics education

研究代表者

角間　陽子（kakuma, yoko）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：７０３４２０４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　　900,000円

研究成果の概要（和文）：　家庭科教育において生活経営力を評価するパフォーマンス課題の開発を目的に研究を行った。生活経営力は「ａ他者とよい関係をつくる」と「ｂ生活の在り方を社会との関係から多角的に省察し変革する」を設定し、中学校家庭科の学習内容を踏まえたパフォーマンス課題と授業及び教材を作成し、教育実践によって有効性を検討した。また、生活経営力と関連する生活資源について中学生の意識を調査した。
　生活経営力ａは身近な他者とよい関係をつくるために必要な要素の有無による会話を体験させる学習活動が、生活経営力ｂは商品の購入における意思決定過程の可視化や商品の使用価値に気づかせる教材の工夫が、学習内容の永続的理解へとつながった。

研究成果の概要（英文）：The aim of the current study to develop performance tasks to evaluate the ability to manage life's resources as part of home economics education. The ability to manage life's resources has 2 dimensions: (a) “having good relations with others” and (b) “reflecting on and altering the way one lives from various perspectives.” Performance tasks, lessons, and instructional materials were created based on the middle school home economics curriculum and their effectiveness was examined in practice. Middle school students were surveyed regarding their attitudes towards life's resources and the ability to manage those resources. Students discussed what is and is not needed to have good relations with friends and family (the (a) dimension). Instructional materials showed students the process of deciding whether or not to purchase a good and made students aware of the use-value of goods (the (b) dimension). This approach leads to enduring understanding of the curriculum.

研究分野：家庭科教育学

キーワード：生活経営力　パフォーマンス課題

１．研究開始当初の背景

平成20年の中学校、同21年の高等学校の学習指導要領改訂において、家族・家庭、消費生活、生活経済や生活設計といった生活経営領域が、家庭科の主要な学習内容として位置づけられた。生活経営は、私的生活の場において構成員個々人の人間としての自立、発達と自己実現を最善のものにし、生活の質を高めるための、利用可能なすべての生活資源の適切なマネジメントを目的としている。構成員が複数である場合には、人間としての自立、発達と自己実現及び生活の質が相互に矛盾しないよう調整することが求められる。つまり、私的な生活といえども個人や内部の要素によってのみ、その在り方が決定づけられるのではなく、他者の存在や外的な状況との関係がより複雑となっており、かつ、それらの影響を強く受けるようになった現在の生活においては、その経営に必要な事実的知識や個別的スキルであっても変化が著しく、有用性が急速に失われるものが多い。また、多様化する生活の在り方を鑑みた時、これらの知識やスキルの一般化が困難になっている。したがって、生活経営領域の学習においては、思考力・判断力や意欲・態度をこそ涵養し、それらを評価するパフォーマンス課題の開発が喫緊の課題となっている。このような状況を鑑み、日本家政学会生活経営学部会では社会、経済システムが大きく転換している現状を鑑み、生活の実態と課題を把握し個々の生活者の抱える生活の諸課題を解決するだけでなく、私と公の関係性を問い、共同・協働のための場やしくみづくりを行いながら、社会システムを変革する「新たな生活経営力」が求められているとした。しかし、家庭科教育においてこの「新たな生活経営力」を育成するための具体的な学習指導の在り方や、生徒がどのような状態になればこの「新たな生活経営力」を身に付けることができたのかという観点からの研究は緒に就いたばかりであるといえる。

また、新学習指導要領では各教科等において思考力・判断力・表現力等を育成する観点から基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語環境を整え、言語活動の充実を図ることが求められている。中央教育審議会による「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」でも、学習状況の評価の観点を「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」に整理し、「思考・判断・表現」の「表現」は基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動において思考・判断したことと、その内容を表現する活動とを一体的に評価するものであるとしている。さらに思考・判断の結果だけではなく、その過程を含めて評価することが特に重要であるとして、「パフォーマンス評価」が推奨されている。

一方、研究開始当初に既刊されていたパフォーマンス課題の評価研究をみると、家庭科での実践は掲載されていない。家庭科教育における生活経営領域では、消費生活や福祉、生活設計の学習指導についての研究がなされているものの、行動の変容の評価や生活課題の解決に生活資源の充実・活用を図るような教材や授業実践、評価については今後の課題とされている。生活経営領域における「本質的な問い」「永続的な理解」を整理し、パフォーマンス課題を開発するとともに、様々な生活場面で実際に活用できる「新たな生活経営力」の育成に有効な学習指導の在り方を構想し、生徒が取り組んだパフォーマンス課題を分析することで、家庭科教育における生活経営領域の学習評価について具体的な提案をしていくことが、本研究の学術的な特色・独創的な点である。

２．研究の目的

本研究の目的は、家庭科教育において生活経営力の育成を評価するためのパフォーマンス課題の開発である。家庭科では生活経営領域の学習の重要性が高まっているものの、生活内部の要素だけではなく、生活外部の状況からの影響を強く受けるようになった現在の生活経営においては、より深く多角的に思考する力や、生活問題の解決に必要な生活資源を判断し活用する力、他者とかかわったり合意形成を図るなど連携する力が求められている。家庭科における生活経営領域の学習においてもこれらの力をより一層、育成していかなければならない。一方、教育現場では思考や態度の評価に対する困難を抱えており、指導に消極的な姿勢も見受けられる。したがって、生活経営力の育成を評価するパフォーマンス課題を開発することは、生活経営領域の学習指導の在り方を問い直すことでもあることから、本研究は家庭科教育の発展の寄与するものであるといえる。

３．研究の方法

(1)学習者である生徒へのアンケート調査

①ものづくりを通して地域の産業や職業への理解を深めたり、多面的な発想や工夫ができる生徒の育成を目指している研究協力校において、家庭科で学習したことを活用したものづくりを行い、地域での活動に参加した１学年の生徒へのアンケート調査を実施した。調査時期は2013年12月～2014年1月で、学習した 25 項目のそれぞれに対する「できるようになった／わかった」「活かせた／役に立った」という 2 つの観点について、4 件法により自己評価する形式で回答を求めた。

②生活や地域の活動についての知識・技術の活用と、生活の質や社会参画との関連に対する中学生の意識を①の研究協力校において調査した。実施時期は 2014 年 4 月、同年 6 月～7 月（中間）、2015 年１月（最終）で、

対象は１学年の生徒である。3 回の調査では生活資源としての知識・技術の習得と生活の質や社会参画との関連について 18 項目を設定し、4 件法で回答を求めた。中間調査では「家庭科で学んだ知識・技術と生活場面での活用」についての質問を、最終調査ではさらに「生活の質の向上や社会参画に必要となる知識・技術」についての質問を追加し、回答形式は自由記述とした。

(2)生活経営力ａを評価するパフォーマンス課題の開発

はじめに、本研究における生活経営力ａ、すなわち「他者とかかわったり合意形成をはかる力」を評価するパフォーマンス課題のシナリオと、パフォーマンス課題に取り組むための学習指導過程及び教材を作成した。次に研究的教育実践を研究協力校の１学年 4 クラスの生徒を対象に、2015 年 10 月下旬～11 月上旬にかけて行った。さらに、学習の定着を見取るための事後調査を同年 12 月下旬～2016 年 1 月上旬にかけて実施した。以上により得られた生徒のパフォーマンスを分析し、パフォーマンス課題のシナリオや学習指導について検討した。

(3)生活経営力ｂを評価するパフォーマンス課題の開発

①はじめに、本研究における生活経営力ｂ、すなわち「生活の在り方を社会との関係を踏まえて多角的に省察し、変革する力」を評価するパフォーマンス課題のシナリオを作成するために、具体的な生活場面を消費生活の学習で設定した。その上で消費生活学習における「永続的理解」を検討し、責任がもてる意思決定をするための思考の原理を体験的に学ぶ授業を構想し、学習指導案と教材を作成した。研究協力校の１学年 5 クラスの生徒を対象として、2013 年 6 月～8 月にかけて研究的教育実践を行った。

②①の結果に基づいて消費生活における「永続的理解」に至る「知の構造」を整理するとともに、食品の選択・購入場面での「永続的理解」を評価するパフォーマンス課題のシナリオを作成した。次に、このパフォーマンス課題に取り組むための学習指導過程と教材を作成し、研究協力校の１学年 5 クラスの生徒を対象に研究的授業実践を行った。得られた生徒のパフォーマンスを分析した。

③②の結果を踏まえ、内容を精選する方向で改善した 2 種類のパフォーマンス課題のシナリオ及び、このパフォーマンス課題に取り組むための学習指導過程と教材を作成した。研究協力校の１学年 5 クラスの生徒を対象に研究的授業実践を行い、パフォーマンス課題に対する生徒の解答を分析した。

(4)授業者である家庭科担当教員へのインタビュー調査

生活経営力ａと生活経営力ｂのそれぞれを評価するために開発したパフォーマンス課題のシナリオと、パフォーマンス課題に取り組むための学習指導過程及び教材について、授業者である中学校家庭科担当教員へのインタビューを行った。調査は 2016 年 7 月～8 月にかけて、1 回につき約 2 時間で実施した。事前に質問内容を送付し、一部の項目については記入を依頼した。

インタビューではまずパフォーマンス評価及び本研究における生活経営力ａとｂについて解説し、モデル授業として本実践で使用したワークシート等を示しながら学習指導過程を説明した。その後、教育現場への導入の可能性についての意見を自由に述べてもらう形式で行った。

４．研究成果

(1)①学習した内容 25 項目のうち、23 項目で「できるようになった／わかった」が「活かせた／役に立った」より高い値となった。具体的には「学校生活の中で、作品や本の寄贈、職場体験の受け入れ、講座の講師など、地域の方にお世話になっている」「地域ではいろいろなボランティア活動が行われている」「ボランティア活動はいろいろあるので、中学生でも自分ができることや得意なことで活動できる」「中学生の発想が商品化されたものがある」等の項目であった。「できるようになった／わかった」の値に比べて「活かせた／役に立った」の値が高くなった項目は、衣生活領域の学習内容であり、地域の活動に参加して販売する商品の製作に必要な技術であった。

「地域活動への参加を通して、人のためになることを考えられた。将来に考えたことを生かせたらいいと思う」「地域や社会に役立てることを自分で見つけて実行していきたい」「中学生でも社会の役に立とうとすれば、できることはなんでもあることが分かった」「これまで学習してきたことを、社会で生かしていきたい」「自分の地域でなければいいや、と無責任で思ったけど、困っている地域を助けたいと思うようになった」等の自由記述から、中学生でもできることがあると気づき、自分なりにできることは何かを問い直すとともに、地域の一員としての自覚をもって社会に参画していこうとする生徒の姿が認められた。地域のニーズや課題を調べたり、学んだことやできること、すなわち生活資源を活用してニーズに対応したり課題を解決していく活動を生徒が主体となって創出できるように展開する題材を計画していくことが求められる。

②全 3 回の調査に共通する 18 の質問項目ごとに平均得点を算出したところ、「手先が器用になる」「近所の人とあいさつなどコミ

ュニケーションがとれるようになったり、地域の活動に参加できるようになる」の2項目で、最終調査の値が最も高くなった。3回の調査のそれぞれで最も高い値となったのは「大人になった時など将来の自分の生活に役立てられる」であった。

中間調査で加えた質問に対する回答からは、生徒が家庭科で学んだ知識・技術を各自の生活場面で活用していることが読み取れたものの、生活の質との関連は個別の知識・技術を発展させた内容にとどまっており、「環境」や「他者との共同」についての記述は少なかった。

最終調査でさらに追加した質問に対する自由記述を「個人／他者」の視点及び生活の「内部／外部」の組み合わせによる4つの区分で分析したところ、生活の質を高めるために身に付けたいと生徒が考えた知識では「個人の視点／生活の外部」がやや少なく、技術では「個人の視点／生活の内部」が顕著に多い結果となった。また、中学生ができそうだったりしていきたいと考えた社会参画の記述数は 83 であり、具体的には雪かきやゴミ拾い等の生活環境整備が最も多く、次いで高齢者に役立つものや避難所で使えるもの等の製作が挙げられていた。これらの社会参画に必要として、製作の知識や技術等の「人的生活資源」、高齢者や地域活動についての「情報」、一緒に活動する人や相談できる大人の存在、活動場所等の「社会的資源」が挙げられていた。個人の生活であっても他者とのかかわりがあること、内部の生活であっても外部とつながっていること等、生活経営の枠組みを全体的に捉えられるような学習指導の必要が見出された。

(2)中学校家庭科でかかわる他者には幼児、家族、地域の人がいる。本実践では家族を取り上げてパフォーマンス課題のシナリオを作成した。自分がやらなければならないことと、家族からの依頼とを調整する場面において、どのような言葉を選ぶことができるか、どのような態度でその言葉を返すかを解答させた。このパフォーマンス課題に取り組むための学習指導過程においては、他者とよりよくかかわるための知識とスキルにアサーティブなコミュニケーションを設定し、アサーションチェックを行った。よりよいかかわりにおいてアサーティブな言葉を選ぶことの意義、アサーションの要素には相手の気持ちに配慮することと、自分の意見を伝えることの2つがあること、コミュニケーションには言葉だけでなく態度も重要であり、言葉と態度が一致していないとアサーティブな言葉を選んでも相手に伝わらないこと等をシミュレーションすることで、実感を伴う理解となるように工夫した。

生徒のパフォーマンスを評価するためのルーブリックは、「観点1：自分の意見を伝える言葉を選ぶ」「観点2：相手の気持ちに配慮する言葉を選ぶ」「観点3：言葉と一致した態度」のそれぞれを3段階で評価するように作成した。B以上の評価となった生徒は観点1が78名、観点2が58名、観点3が74名であった。学習の定着を見取るために実施した事後調査では、観点1で38名、観点2で73名、観点3で75名がB以上の評価となった。生徒が自分自身のアサーションレベルを認識した上で臨むような学習指導過程の改善点や、事後調査におけるパフォーマンス課題のシナリオを精錬させる必要が示唆された。

(3)①学習指導過程及び教材の作成にあたっては、研究協力校の年間指導計画との連携を図ることとした。そのため生活の在り方を省察する具体的場面に消費生活における食品の選択・購入を設定した。本時の学習問題で用意する方法を選ぶ食事は、生徒が学校行事に向けた事前学習として調理実習を行っており、その際、環境に配慮した調理の工夫についても学んでいること、失敗の可能性が低く仕上がりに大きな差が生じ難いため、調理に自信のない生徒でも「自分で調理する」という方法の選択に不安を持つ可能性が少ないこと、加工の段階による調理済み食品の種類が少ないこと等の理由によって決定した。はじめに「休日に自分ひとりの昼食を用意する」場面で提示された4つの方法から1つを選択し、理由をワークシートに記入させた。次にそれぞれの方法について各自が考えるメリット・デメリットを挙げさせ、「経済性」「調理」「環境への影響」「栄養」「安心・安全」の観点から分類・整理する活動にグループで取り組んだ。さらに自己の価値を可視化しながら最初に選択した方法を見直した。本実践ではパフォーマンス課題導入の前提として、思考・判断した過程や結果を表現する言語活動の充実を意図したまとめとし、生徒にその方法を選んだ理由や、授業で学んだことを記述させた。

選んだ方法を見直した後の理由では思考の過程が明確になっており、他者の考えと比較しながら自分の考えを深めたり発展させたりすることができていた。また、直感によらず根拠に基づいて説明することができるようにもなっていた。さらに、本実践によって生徒はそれぞれの方法にメリットとデメリットがあることに気づいたり、責任がもてる意思決定をするためには思考の原理を用いることが必要であることを理解していた。また、「自分にとって1番最適なものを選ぶことは、大人になっても役立つ」「これからの事にいかしていきたい。生活にとりいれていきたい」「選ぶ時は、今日習ったことを思い出して選ぶようにしたい」等、他の生活場面においても本実践での学びを活用すること、すなわち思考の原理の一般化につながる内容の記述が認められたことから、本実践に生活経営力ｂの育成を評価するパフォーマンス課題の導入が有益であることが明確と

なった。

②最適解をさまざまな要件に照らして多角的に考えられる力の育成が求められている消費生活の場面において、生活経営力ｂを評価するパフォーマンス課題のシナリオを作成した。このパフォーマンス課題に取り組む学習指導過程 2 単位時間では、まず、生徒が自分の選んだ商品のメリット・デメリットを付箋に書き出して複数の観点から整理した後、グループですべての商品について同様の活動を行い、自己の価値を明確にして最初の選択を見直した。次に、他者が関係するという設定が加わった場合に、商品の選択がどのように変化するのか、商品選択に影響を及ぼす自己の価値はどのように変化するのかを考えた。さらに、この商品を選ぶ際に必要となる情報を読み取りながら、なぜその情報が必要であるのかを学んだ。最後に、二回目の選択と同じ他者が関係する設定で、異なる商品選択の場面のパフォーマンス課題に取り組んだ。

生徒のパフォーマンスを分析したところ、授業で確認した思考の原則としての意思決定プロセス 6 要素すべてが含まれていた生徒は 3.7%、まったく含まれていなかった生徒は 8.6%で、含まれていた要素の平均は 2.4 という結果であった。最も多かったのは「複数の方法を考える」が含まれている記述で、118 名の生徒に認められた。一方「情報を収集する」を含む記述をした生徒は 26 名にとどまっていた。複雑な思考の過程を可視化できるようなワークシートやパフォーマンス課題への解答形式を再考する必要が見出された。

③①の結果を踏まえて、「情報を収集する」という意思決定プロセスの要素に焦点化したパフォーマンス課題のシナリオを 2 種類作成した。教科書の消費生活学習の頁には、商品を適切に選択するための情報として「品質」が挙げてられているものの、「品質」について詳細に言及されてはいない。本実践では商品学に基づいて「品質」を使用価値とし、これと商品の特性である付加価値とを見極めて選択するとともに、特定の商品を選ぶという消費行動が社会や経済、環境に及ぼす影響を考えられるような学習指導過程と教材を作成した。本実践で取り組むパフォーマンス課題のひとつには生徒が衣生活領域の学習で製作経験のある、布製で一定の大きさのものを入れることができる商品を選択する場面を設定したことから、学習指導過程で取り上げる商品も同様の条件を有する商品として、使用価値を満たしていない状態の教材を予め製作し、使っている様子を写真で示すことで生徒の気づきが促されるようにした。また、同じ使用価値を有していても消費者がどれを選んで購入するかという行動によって及ぼされる社会や経済、環境への影響が異なる 4 種類の商品を提示し、商品情報を読み取って付加価値を整理する活動に取り組むことにより、自分自身の消費行動を見直すことができるようにした。

パフォーマンス課題Ａは授業前に行った調査と同じ商品を購入する場面としたが、選択肢は除いた状態でシナリオを作成した。生徒のパフォーマンスを分析したところ、値段のみを記述した生徒は事前調査の 32 名から 3 名に著しく減少しており、本実践によって商品選択の視点が多角的になったことが伺える。商品の現時点での使用価値に関する記述は 67 名、将来にわたっての使用価値に関する記述は 72 名に認められた。付加価値のみを記述していた生徒は 10 名であった。パフォーマンス課題Ｂは、本実践によって商品の本質を見極めて選択するという消費行動に結びつく、より深いレベルの理解に達することができたかを見取るためのシナリオとして作成した。値段のみを記述した生徒は 3 名と僅かで、商品の現時点での使用価値に関する記述が 28 名、将来にわたっての使用価値に関する記述が 8 名の生徒に認められた。また、55 名が値段や商品の使用価値とセールスポイントとして示された付加価値との整合性に言及していた。一方、未記入だったり本実践で学んだことを活用した表現になっていない生徒がいたことから、パフォーマンス課題のシナリオで加筆・修正すべき点が示唆された。また、それぞれの商品の情報が社会や経済、環境に及ぼす影響とどのように関連しているのかを認識できるよう、学習指導過程や教材をさらに改善する必要性が明らかとなった。

(4)所属の異なる 3 名の中学校家庭科担当教員より調査協力を得ることができた。年齢は 40 代が 2 名と 50 代が 1 名、経験年数はそれぞれ 10 年、20 年、30 年である。全員が教科の免許を有しており、先進的な研究的教育実践に取り組んできた実績がある。

家庭科の学習評価についての困難点として、「家族・家庭と子どもの成長」領域では家族との関係が生徒によって様々であり、プライバシーにも関わるため苦慮していること、「消費生活と環境」領域では学習が実際の行動を伴い難く、実生活での取り組みの継続性が懸念されることが挙げられた。本研究で開発したパフォーマンス課題のシナリオと学習指導過程・教材はこの 2 つの領域でのものであることから、いずれの教員からも各学校の生徒に応じた部分的な調整が必要ではあるが、導入の可能性は高いとの回答であった。

生活経営力ａを評価するパフォーマンス課題のシナリオと学習指導過程・教材については、生徒のクラス内での人間関係に配慮した学習形態にすることが望ましいこと、シミュレーションの会話を家族との場面にすることでさらなる学習効果が期待されること、

家族との関係についての学習でこれまで取り入れてきた活動と関連させながら深めていく指導も考えられること、生活経営力ｂを評価するパフォーマンス課題のシナリオと学習指導過程・教材については、生徒の生活が多様化していることに鑑み、パフォーマンス課題の場面設定をよりリアルに体験させるため、モデル授業で取り上げた商品と同様の要素を有する数種類の商品から選択できるように教材を準備すること、価値だけでなく、場面設定の条件によって自己の選択がどのように変わるのかを丁寧に可視化できるような学習指導過程とすること、パフォーマンス課題の解答形式は意思決定プロセスの要素を示して思考の深さを評価すべきであること等、パフォーマンス課題のシナリオと学習指導過程及び教材をさらに改善していくために有益な知見が示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①角間陽子、小口博子、消費生活において「活用する力」を評価するパフォーマンス課題の検討、東北家庭科教育研究、査読有、15 巻、2016、31-37

②角間陽子、小口博子、中学校家庭科における意思決定プロセスの指導と評価の一体化に関する研究、東北家庭科教育研究、査読有、14 巻、2015、17-23

③角間陽子、小口博子、消費生活の学習における「永続的理解」を志向した中学校家庭科の授業、東北家庭科教育研究、査読有、13 巻、2014、41-47

〔学会発表〕（計 5 件）

①角間陽子、「他者とよい関係をつくる力」を評価するパフォーマンス課題の検討、日本家庭科教育学会第 59 回大会、2016 年 7 月 9 日・10 日、朱鷺メッセ（新潟県・新潟市）

②角間陽子、小口博子、生活資源としての知識・技術と生活の質や社会参画との関連に対する中学生の意識、日本家庭科教育学会東北地区会平成 27 年度（第 38 回）研究会、2015 年 10 月 3 日、山形テルサ（山形県・山形市）

③角間陽子、小口博子、消費生活において「活用する力」を評価するパフォーマンス課題の検討、日本家庭科教育学会第 58 回大会、2015 年 6 月 27 日・28 日、鳴門教育大学（徳島県・鳴門市）

④角間陽子、小口博子、中学校家庭科における意思決定プロセスの指導と評価の一体化に関する研究、日本家庭科教育学会 2014（平成 26）年度例会、2014 年 11 月 15 日、東京学芸大学（東京都・小金井市）

⑤角間陽子、小口博子、消費生活の学習における「永続的理解」を志向した中学校家庭科の授業、日本家庭科教育学会 2013（平成 25）年度例会、2013 年 12 月 7 日、東京学芸大学（東京都・小金井市）

６．研究組織

(1)研究代表者
角間　陽子（KAKUMA, Yoko）
福島大学・人間発達文化学類・教授
研究者番号：７０３４２０４５

(2)研究協力者
小口　博子（OGUCHI, Hiroko）